



今月の主な目次

- 牧草品種選定のポイントと優良品種の紹介
- 今後の相場動向について

- 営業所からのお便り(8)  
八雲営業所からの紹介：  
「土づくりの手始めに炭カルを施用してみませんか？」
- 平成22年産粗飼料の傾向

時の話題

リスクとしての異常気象・口蹄疫

立春が過ぎたといえ、北海道はもとより府県の日本海側では年末より記録的な豪雪、寒波が到来、北極海の高気圧が西シベリアにて寒気が蓄積され日本に寒波が到達すると言われていますが農業の宿命というべき気候との戦いがまた始まります。

昨年からの世界的な異常気象は資源の生産に大きな影響が出ており、流通飼料では、ロシアで記録的な猛暑の影響で早魃になり小麦不作により輸出停止の措置がとられシカゴ相場を押し上げる要因にもなりました。また、オーストラリア西部での山火事、東部での年末からの大雨洪水による被害は輸入粗飼料の産地相場を押し上げると共に供給量が慢性的に不足することが見込まれる状況にあります。土地基盤の強さを持っている北海道酪農は「土一草一牛」の循環を成立させるか否かにあり、飼料基盤に立脚した資源循環型経営を確立し、粗飼料を増やす中で、結果として乳量を増やしていく粗飼料自給率の向上が重要と認識しているところです

一方、昨年4月に発生した宮崎県の口蹄疫は、約29万頭を殺処分し防疫措置完了後、国際獣疫事務局(OIE)に正常ステータス回復のための申請を行っていたところですが、今般2月にOIE科学委員会において我が国の口蹄疫正常ステータスの回復が認定されました。しかしながら、韓国等アジア周辺諸国では、依然として本病が発生しており、我が国への侵入リスクは高いと言わざるを得ません。韓国では、昨年1月に

発生し、6月にはいったん終息したものの、11月に再発が確認され感染地域が拡大、牛、豚飼養頭数の約25%、316万頭が殺処分対象となり甚大な被害の終息がまだ見られません。更に、国内では高病原性鶏インフルエンザ(H5N1亜型)の発生が確認され1月に入りブロイラー、採卵の主産地である宮崎・鹿児島・愛知で約58万羽の殺処分、全国どこで発生してもおかしくない状況にあります。農水省消費・安全局から防疫体制の再徹底の通達が出されているように口蹄疫清浄ステータスを機に、このステータスが継続されるよう、より一層、防疫体制を強化していく必要があると考えております。

さて、昨年は、弊社が雪印乳業(株)から分離独立して創立60年の節目の年を迎えられたことは、長年にわたり弊社を支持して頂いた生産者の皆さん、関係機関の皆さんの賜物であり、ここに深く感謝を申し上げます。今年は新たに4月より雪印メグミルク(株)の一員として、第二の創業期と捉え、グループシナジーを発揮させ、「健土健民」の精神を柱とし、社是である「技術と誠意で農業奉公」を行動指針として役職員一同農業の発展に貢献していく所存でございます。

永続的に安定した酪農経営を目指すために①土地基盤の整備、②自給飼料の増産、③健康な牛作りを中心とした話題を雪たねニュースを通じて皆さんにご紹介していきますので今後とも引き続きのご愛読をお願い申し上げます。今年の自給飼料が良質のものが確保できることを心より願うと共に、ぜひ、最寄りの営業所への相談も気軽にお声を掛けて頂きたく、宜しくお願いいたします。

専務取締役 岡村 一範